

取組紹介 平成29年度第8回FDセミナー（AP事業報告会）

AP事業取組報告

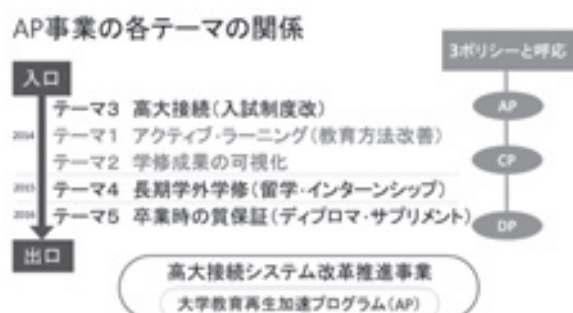
関田 一彦

学士課程教育機構 副機構長

司会：学士課程教育機構、副機構長関田より
AP事業全体の取組みについてご報告いたします。
関田先生よろしくお願い致します。

関田先生：さきほどは久しぶりに眠くならない、長時間の講義を聞き、非常に充実した気持ちです。AP事業は今年で4年目を迎えました。本来は今年が中間評価の年で、文科省から昨年中に中間評価が出されると想定しておりました。「ここがよかった」「ここを直さない」という具体的な指摘を受けての報告会にしたかったのですが、そのあたりの目論見は外れてしまいました。私どもがみなさまと一緒に展開している事業について掻い摘んでご案内できればと思います。

今日は時間も限られていますので、AP事業の概略と今年の指標達成状況をいくつかお話しし、そのうえで、特にアピールしたいところをお話しする流れで30分ほどお付き合いいただければと思います。先生方でAP事業にご関心のない方からすると「こんなにたくさんあるのか」と思われるかもしれませんが、図のようにAP事業は4年前にスタートし、テーマが5つあります。

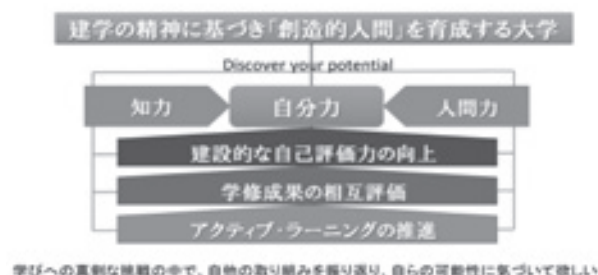


本学の場合にはテーマ1とテーマ2の複合型です。ですから複合型をあわせて6種類のAP事業が日本中で走っています。その中のテーマ1からテーマ3までが4年前にスタートして、テーマ4が3年前、テーマ5が2年前にスタートしました。同じAP事業といっても取組の期間は異なります。昔は「大学教育再生加速プログラム」といったのですが、今は高大接続システム改革推進事業の中の一つという形で少し位置づけが変わっております。いずれにしても文科省が5つのテーマに沿って日本中の大学を人参で釣って走らせているという状態です。たとえばテーマ3は高大接続入試制度改革です。本学も今年から始めましたPASCAL入試もそうですが、多面的評価の先導的な例が追手門大学のアサーティブ入試です。この入試は実はAP事業です。テーマ3はアドミッションポリシーに関連するところですが、そして最後にスタートしたテーマ5は出口保証、卒業への質保証ですからディプロマポリシーに関係するものです。代表的なものはディプロマサブリメントと言われる取り組みです。その中間でカリキュラムに関係するところで私たちが取り組んでいるアクティブラーニングや学修成果の可視化、少し変わったところではアウェー体験、留学やインターンシップが走っています。

AP事業を並べてみると、実は入り口から出口に向かってかなり角度のついた取り組みを文科省が補助金を使って押し出していることがわかります。本学の場合、補助金のためにAP事業をしているのではなくて、うちの大学がやり

たいことをするためにAP事業を借りているというスタンスでやってはおりますが、他大学の参考になることも多かろうということで、そのあたりのところを本日はお話させていただければと思います。

まず、本学の教育目標と取り組みの関係について図にしてみました（下図）。最初の取り組みがテーマ1の「アクティブラーニングの推進」です。創価大学の場合は、学生が講義の聴きっぱなしではなく、質疑・応答などお互いに関わるアクティブラーニング的な授業は多いのですが、それをしっかり推進していきましょうという取り組みになります。それから「学修成果の可視化」で本学が取り組んでいるのは、「アセスメント科目」の試行です。これは、どの科目でも実施できるように、学生が自分の成長の度合いをルーブリックを使って確認したり、授業について目標を立てて、どこまで学んだのかの進捗を、一人ではなく仲間と一緒に「僕はこんな風に学んだ。君はどうなの」と振り返る相互評価を取り入れています。人間というのは自分ひとりで全てを悟るのはなかなか難しく、いろんな人の取り組みをお互い相互評価する中で初めて自分自身が見えてきます。相互評価をすることで自分自身の評価が固まってくる。また、自分自身が見えてくれば、相手の成長もよく見えてくる。



授業の中で様々な学習活動に取り組み、その活動をみんなで振り返り、その振り返りを通じて自分自身の振り返る力をつけていくことが、「自分力の発見」という創価大学が創造的人間に向かって大事にしているキーコンセプトにつながっていく。これをしたいので、APのテ

マ1とテーマ2をお借りしているという話になります。

では、具体的な取り組みはどのようなものかといいますと（下図）、「アセスメント科目」というものをカリキュラムの中に入れ込んで、「1年生から4年生に向かってそれぞれの所でしっかりと振り返りましょう」「アクティブラーニングをして、その中で自分の成長、変化を振り返りましょう」ということです。そしてそうした振り返りを溜めていって、最後に「学びの集大成」の形で総括的な振り返りをして、自分の人生の原点にして社会に出て行ってもらおうという流れを考えています。このプロセスに入っていくためには、入学の段階で丁寧なオリエンテーションが必要になります。そこで、一昨年から初年次教育推進室を作って、入学前から全体をシームレスにつないでいくことをしています。初年次教育のところから出口へ向かっているところも含めて、入口から出口に向かった質保証を伴った大学教育を目指して取り組んでいるのが本学の取り組みになります。



文科省は取り組み達成を点検するためにたくさん指標を求めます。みなさんのお手元にあるパンフレットですとファクトデータのところにいくつかあります。先導学部の経営学部の割合ですが「アクティブラーニングをどのくらい導入していますか？」では、4科目の内の3科目はアクティブラーニングを取り入れてやっています。さらにはその中でも特に良質なアクティブラーニングは35%ですので3つに1つの状態です。アクティブラーニングの科目を学生は取っているかどうかになりますと、少なくとも1

いくつかの指標達成度 (APシムプレット参照)

先導学部のアクティブ・ラーニング普及にともなう授業外学修時間の増加					
	H25	H26	H27	H28	H29
学生1人当たりアクティブ・ラーニング科目受講数	2.7科目	2.64	2.72	3.16	3.46
学生1人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間(週毎総計)	2.5時間	2.78	3.13	3.61	3.81
アクティブ・ラーニング科目1科目あたりの平均授業外学修時間(分)	55.8分	63.2	69.0	68.5	66.1
取り組み開始年度					

学期に3つは取っている状態です。

このような形で創価大学は着実にアクティブラーニングが質のよいものになり、科目数も増えています。分析的な視点で確認をしますと、取組みが平成26年からスタートしていますので、その前年をベースとすると、平成25年度では、いわゆるアクティブラーニング系の科目が1学期に経営学部2.7科目（3科目弱）開講されていました。

その時に学生はアクティブラーニングに関連する2.7科目で2.5時間、一科目あたり約56分、授業外に学修していました。3年目になると着実に2.7から3科目、今年は3科目半になり、人によっては1学期のなかで4科目5科目をアクティブラーニング型の授業を受けているでしょう。平成29年度のアクティブラーニング科目の一人当たりの授業外学修時間は3.81ですから4時間弱まで増えています。4時間が多いか少ないかですが、3時間半×3科目として10時間半です。学生はアクティブラーニング以外の科目も取っていますのでトータルすると優に10時間以上の授業外学修時間になると思います。3、4年生になると履修する科目が減りますから、なかなか実態がわかりませんが、言えることは、これまで一科目60分前後の授業外学修時間だったのが70分まできたということです。最終的には80分まで持っていきたいのですが、ちょっと今年は踏みとどまっている状態になっています。

先ほど菊池先生がおっしゃったように、基本的に学生が使える時間は決まっています。その

中でどんな風に授業外学修時間を増やしていくのかというのが、やはり課題になります。アクティブラーニングの量に比例して授業外学修時間が増えていくかといいますと、そう簡単には 아닙니다。しかし、アクティブラーニングの科目数の割合が少しずつ増えていくなかで授業外学修時間が増えているのは間違いありません。学生の中でもアクティブラーニングの機会が1年生から4年生まで増えてくると、いよいよ「自分たちの時間とどう折り合いをつけるのか」「先輩と同じことをやっているは無理だ」と、まさに修める学修を意識するようになってくるでしょう。「修めるような取組み」とは、本学でいう「良質なアクティブラーニング」になると思います。そこで良質なアクティブラーニングを今後しっかり展開していくことが、本取り組みの一つの大きな課題がここにあることを正直に申し上げておきます。学部ごとに導入の時期が違い、学部ごとのカルチャーの違いがありますが、遅かれ早かれアクティブラーニングの科目が増えていきますので、学生が今までの先輩と同じようなリズムで授業外学修をしていきますと辛くなってきます。この時にどうやってタイムマネジメントをするのかがおそらく問われてくるだろうというのが、これから1、2年の間の本学の大きな課題の一つかなと意識しています。

そういった状態をどのようにモニターしていくのが非常に大事です。本学の場合、去年の段階では経営学部を先導学部にして、文学、看護、法学、経済、教育学部まで来ていたのです

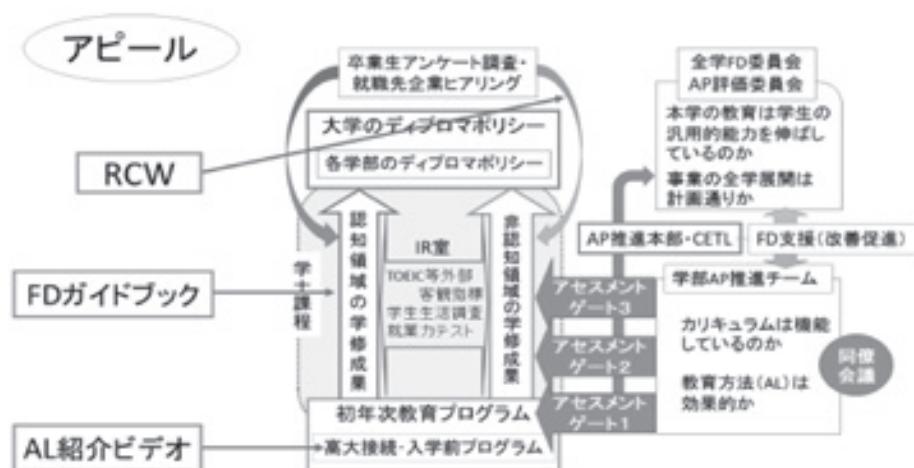
が、平成29年度は全学部が揃いましたので、来年度からは理工学部と国際教養学部もそれぞれの科目でアセスメントが始まります。アセスメントというのはモニターのことです。「学生がどんな風に勉強しているのか」、「自分たちが立てた目標に対してどのくらい頑張っているのか」と学期の中間と最後で振り返りてみて、どんな風に学んだのかを学生たちに書き残させます。これを先生方は集めて読みます。ご自分が担当している授業で、学生がどんな風に学んでいるのかを学年・学期に学生が書いたものから読み取ります。読み取った結果を本学の場合には、同僚会議のなかで、いろんな学部の先生たちと皆で「今の学生はこうなっているよね。ここが問題だと思うんだけど、どう思いますか?」と話をするわけです。同僚会議がしっかり回れば、まさに学生の「習うから修める」への転換がおきます。じわじわアクティブラーニングの科目が増えていく中で、学生が「どうやって時間を作るんだい?」「今までと同じではダメなのか」と我々教員とせめぎ合うなかで、学生をしっかりリードするためにはモニターが大事になります。モニターするためのアセスメント科目が各学部で確実に増えていきますから、丁寧にモニターしながら、問題を教員側が共有しながら進んでいくというのが本学の取り組みになります。

では、今年の取り組みではどんなことをやっているのか少しアピールしたいと思います（下

図）。初年次から卒業に向かって、知力と人間力のどちらもしっかり伸ばしながら大学が決めているディプロマポリシーに沿った学生を育てていくのですが、今年はその中でも特に初年次の部分とカリキュラム・授業の部分と、卒業に向けてのチェックのための小道具の3つに組みましたので、それらを簡単にご案内ができればと思います。

略称はRCWですが、これは社会に巣立つ準備状況を自己点検してもらうためのもので、いわゆる「勉強が出来たかどうか」ではありません。本学の学生がお世話になっている企業の人事関係の方に毎年10社ずつインタビューをしています。今年で40社インタビューしました。「創大生はこんな良いところがある。でもこういうところは頑張してほしい」などいろんな意見があります。そういったものを12の項目に整理しました。（資料9ページ）それからもう一つは、「ロジカルシンキング」「ライティング能力」「語学力」などいろんな力がありますが、創価大学が強調している様々な力について学生自身が卒業に向かって、重要視しているものを10個ほど選んでいます。

こういったものを合わせた質問表のようなものを作っているのですが、12項目になります。非常にシンプルなもの、いろんな国籍やいろんな人がいても意見交換や意思疎通ができる「グローバルなコミュニケーション力」みたいな力が自分にはついてきているかどうか。企業



学修成果の可視化

問1 創大生が社会(会社)で求められる資質や態度	
1	年齢や性別、時には国籍が異なる人たちと、きちんと意見交換や意思疎通ができる
2	都合の悪いことでも誠実に対応する(誤魔化さない、責任転嫁しない)
3	残業や休日出勤をしなくて済むように時間を効率よく使い、効果的な仕事をする
4	失敗したときや誤った行動をしたときは、素直に「すみません」と言える
5	長期的な視野に立ちつつ(理想や夢は忘れず)、まずは目の前のやるべき仕事に集中して結果を出す
6	一度引き受けたことは、責任を持って、あきらめずに最後までやり切る
7	不明な点はその場で確認し、計画に沿って(約束を守って)取り組み、課題を先延ばししない
8	周囲(上司、同僚、時にはお客様)を巻き込みながら仕事を進める
9	自分の予想と異なる仕事や課題、あるいは状況でも、工夫をして(柔軟に対応し)結果を出す
10	論理的に、あるいは多面的に、最後まで突き詰めて考える(考え抜く)
11	ポイントを絞って、相手に分かるように明快に(納得してもらえるように)話す
12	専門知識の習得や資格取得など、自身のスキルアップに向けて意欲的に(自主的に)勉強する

もつとも平均値が高かった学部

問2 重要視する能力・経験	論理的思考力	数的処理能力	課題発見力	語学力	文章力
	リーダーシップ	困難に立ち向かう経験	自己分析 (社会に貢献する自分力)	企業研究	他流試合 (他大生との交流)

もともと平均値が高かった学部

のみなさんが期待しているものができているかどうか。5段階でチェックして点数が高い、低いが出ます。それから論理的・数理的処理など10個ほどの「学部時代に伸ばしておきたい力」をリストアップして、「自分がどのくらい重要に思っているか」を聞いているのが問2になります。問2について例えば、「文章力って社会に出るにあたって大事だな」と学生は思うんです。ところが次の問題で、「あなたは文章力をどうやって伸ばしたらよいか知っていますか?」とYesかNoで聞くと、「大事だと思ってもその方法がよく分からない」という学生が3割～4割いるわけです。意識はあっても何も動いていないということです。これを自分自身がチェックすると「これ大事にしているのに動いてないな」ということがわかるんですね。

学生自身からみるとどういう項目が自分でできているか、いないか、自分は何が抜けているのかを確認するためのセルフチェックの指標なのですが、これを大学全体として使うと、「どの学部の学生が企業が期待する、あるいは、社会人として期待されることに対してそれなりにできていると思っているのか、いないのか」、あるいは、「どの学部の学生は、特定の力を伸ばすための方法について疎いのか」が学部として見えてくる。大学としてそれが分かってくればその部分についてどうするかキャリアセンタ

ーと協力しながら対応できる。最も平均値が高かったのは経営学部です。社会に一番近そうな学部ですから、そうなりそうですね。ただし「異文化交流」については、やはり国際教養学部が一番高くなりました。それ以外は経営学部が一番高いです。いわゆる「人間的な力」みたいなのが経営学部は強いです。同時に数字や論理、様々な能力についてあまり大事とっていないのも経営学部なのです。基本的に「スキルや力ではなくて、体だよ」「体験的に動いて人と関わっていくのが大事なんだ」というのが非常に強く出ているわけです。それに対してグローバルマインドがあって、ロジカルに話が出来てみたいなのは国際教養学部が一番高いです。

このように学部のそれぞれの癖が出たりします。こんなところを各学部が押さえる中で「学部が育てようと思っている人材像」に対して学生はどの部分に対して自信を持っているのか、いないのかが見えてくるかもしれません。

このような道具を、昨年みなさんにご協力いただき、6学部で千人ほどの3、4年生の学生(5年生も若干混じっていますが)で取りました。今後より具体的なものをご紹介できるようにしていきたいと思っています。創価大学ではとにかく「創造的人間」を作りたい。勉強ができたかどうかはGPAを見れば分かるので、み

なさんがきちんと教えて試験をして、チェックすればそれで分かるわけですが、「人間的なところはどうするの」というところの一つとして、もちろん社会のために人間を作っているわけではなくて「人間のための社会を作る」ために私たちは学生を育てています。そうは言っても、社会が何を考えているかから外れては困るわけなので、社会で私たちがお世話になっている企業のみなさんが考えているような、期待しているような事柄についてはどうなのかがチェックできる小道具です。これが一つですね。

次は初年次の部分ですね。大学が入学前に入学予定者をキャンパスに集め、「これから入学するところは、こんなところですよ」といったガイダンスをしたり、大学生協が入学前オリエンテーションを兼ねたキャンプを企画したりすることが、必ずしも珍しくない時代になっているのですが、創価大学の場合には日本中から学生が来ますので、そんな簡単に集められないのです。それでも創価大学ではアクティブラーニングを中心にして人間教育をしていることをきちんと伝えて、そのつもりになってきてもらいたい。そのためにどうしたらいいかということで、今回ビデオを作りました。あまり時間がないので3分ほど見たいと思います。

～ビデオの視聴～

本学はパスカル入試、推薦入試、学園入試で800人の学生が決まりますので、入学が決まっている方が「入学前の教育のプログラム」を始める時に「これを見ないと先に進めません」という形で埋め込まれているプロモーションビデオになります。大事なのは、高校生にとってみるとアクティブラーニングが盛んな高校から来る生徒もいますが、従来然として入試のための「しっかり暗記をして点を取る」スタイルの勉強をしていたところから創価大学に来て、いきなり「グループでやってください。隣と話してください。」と言われても、それだけで教室に

入るのが怖いと思う方がいない訳ではありません。ですので、少しでも早い段階で「創価大学に行くと、そういう目的でみんなと仕事するんだ」ということをクリアに伝えるのが、初年次教育の一つの大事なポイントです。創価大学の場合には事前に学生を集めることはできませんが、こちらのビデオのような形でお伝えをしています。ビデオではこの後、田中機構長のお話になり、「高校生までは生徒手帳がありましたよね。でも大学には学生手帳はありません」「学生というのはまさに自らが主体的に進んで学ぶから学生というんです。高校生を卒業してください」というメッセージが入っています。もちろん一回聞いただけでぴんと来ることはありませんが、そういった形で入学後も折に触れ1年生の段階で何度も初年次教育の中で「自ら学ぶ」ことを問い続ける。

今、皆さんがお集りなのは中央教育棟、学生は「チューキョー」と呼んでいます、本学のメイン校舎です。この中央教育棟が建つ前は文系A棟がメイン校舎でした。A棟の前庭には一対のブロンズ像があって、学生は必ずその前を通って校舎に入ってきました。そのブロンズ像から「英知を磨くは何のため 君よそれを忘るるな」と「ちゃんと考えなさい」と問われるわけです。そして出てくるときには、もうひとつのブロンズ像が「人生の宝は労苦と使命のなかにのみあるんだよ（労苦と使命の中にのみ人生の価値（たから）は生まれる）」と、「しっかり学んで苦しみなさい。それこそを君たちの人生の宝にするんだよ」と送り出すわけです。

このように一対のブロンズ像が昔は見守っていたのですが、代わりにビデオのような形でメッセージを伝えることを始めました。これが2つ目のアピールポイントになります。

3つ目のアピールポイントは出来たてはやほやなのですが、FDガイドブックです。実はCETLというFD機関ができたのが2000年です。当時、創価大学にはハンドブックがありませんでした。他所の大学はだいたいどこのFDセンターも作

っています。うちは今まで作ってこなかったのですが、すでに9割近くの先生方がご参加されている2日間の研修やフォローアップを含めて、そこで語られた内容や先生方から出てきた様々な質問を取り込みながら、創価大学で行うアクティブラーニング、創価大学の基本的なシラバスの考え方などをまとめています。2日間の研修内容を忘れてしまった人も、これを読み返すと「そんなことやったなあ」と復習になりますし、そういった機会がない方や非常勤の先生のように参加の機会がない方たちに対しても「こんなふうに創価大学は取り組んでいます」としっかりお伝えできる道具を今回作ることができました。

その他 AP 事業として様々なものを展開していますが、例えばアドミッションズ・センターが中心になって進めている PASCAL 入試も、まさに高大接続を意識したものです。LTD 的な学びをしっかりと体験して大学に入ってくる、「予習するのが当たり前なんだ」という学びのスタイルが分かっている学生に来てほしいということで始まりました。PASCAL 入試で100名程度の方が選抜されます。LTD の出来栄が入試の三分の一を占めますので、受験生のみなさんは LTD のやり方を勉強して入学してきます。学部によっては、一年生の一番初めの段階で LTD を使う授業もあるのですが、必ずしも全学部そうではない。「LTDってどこでやるの?」と不思議に思う人もいるかもしれませんが、一年生が取れるような共通科目の「思考技術基礎」(資料12ページ)の中には LTD があります。この様に入試でやっただけでなく受け皿も作りました。「思考技術基礎」は新年度から開講される科目になります。

また、アドバンスト・プレースメント制度も、アドミッションズ・センターが中心に進めています。(資料12ページ) 高校生のうちに大学の授業を受けて、「大学ってこういう所なんだ」とわかり、そこで学んだ単位が入学後に卒業単位としてカウントできる仕組みです。これはも

ともと杏林大学が AP 事業のテーマ3で扱ったものですが、創価大学も「一緒にやりましょう」と誘われたことから始めたものになります。このように初年次教育において、入学前から入学後に向かって何らかの繋がりをしっかり担保しながら、AP 事業を進めているのが本学の取組みになります。

最後に、これまで入口から出口までの教育のうち、入口の話をしました。出口については、先導学部の経営学部は今年で4年目に向かいますので、いよいよ出口に差し掛かります。その差し掛かりでこれから取り組んでいくのが「学びの集大成」を作っていくことです。(資料13ページ)「このように学びの集大成を作ってもらいますよ」という内容が書いてありますのでお手元の資料をご覧ください。ポイントは学生が「本当に創価大学に来てよかった。私はこういう力をつけて社会に出ていける」と改めて実感を持って卒業してもらうためのお手伝いをするのが「学びの集大成」になります。

完成版を今日はご覧いただくことはできませんけども、部分的に経営学部の何名かの学生にサンプルを作っていただきました。それを少し修正したものを簡単にご紹介します。(資料15ページ) この学生は非常に元気な学生です。「創価大学に入学したとき」を振り返る項目では、「高校までは部活ばかりやっていて、頭も筋肉でした。だけどとにかく何事も一所懸命挑戦したいと思っています。でも何をやりたいかがよく分かりませんので探します」という前向きな内容を書いている方です。意欲だけはあったけど具体的なものと言われると分からないという状況でした。一年生のときを振り返る項目ですが、初年次科目で問われることは「学びへの計画性」です。「タイムマネジメントが本当に大事なんだ。自分で折り合いをつけてきちんと課題をやらないといけない」と書いてあります。また、この学生は落語研究会へ入部し、人とかかわっていきこうとしました。とにかく意欲があり何かしたかった。でも、「きちんと課題

を出しましょう」「授業に出ましょう」と最低限のことはきっちりやっていこうと折り合いをつけながら行動した一年間だったと振り返っています。

2年生になると「忙しい忙しい。だからこそのいろんなことを計画してやらないといけない」と心がけ、GPA（最高5.0で）4.0以上を取った非常に優秀な学生です。彼女は、落研でも副部長をやりながら、忙しい中でもきちんと調べることは調べ、みんなと力を合わせながら、というように、今振り返ると改めて自分で周りを動かしていくような自己調整力が鍛えられたなと思うと書いています。

こんな風に、あの学年ではこうだったと自分の学び・学習活動に即しながら丁寧に振り返っていきます。そして最後に「創価大学にはいろんな価値観を持った人がいた。でも仲間と一緒に成長するために、いろんなコミュニケーションをした。これからどんな環境、状況の中でも私は頑張り、挑戦できるという強い思いを持ちました。改めて振り返ってみると漠然としていた自分の意欲が、具体的に日々の課題に挑戦する中で、様々な力となって私自身を形作っていくことに気づきました」と書いています。

少し雑駁な話しになりましたが、この間にはいろんなエビデンスがポートフォリオの中に残されており、それを繋ぎながら一つのストーリーとして語っていく「学びの集大成」を作ります。これは大変な仕事になりますのでオプションですが、3つのアセスメント科目のその先にあるものとして用意されています。「学びの集大成」は来年以降に具体的に進んでいきます。創価大学は、アクティブラーニングを当たり前のように行っていますが、その中で丁寧に学びを振り返っていきます。特にアセスメント科目で強調するのは振り返りです。振り返りのときには仲間と一緒に振り返り、それを通じて自分自身を見つめることができるようになってきます。このサイクルをしっかりと回すことで、最終的には「創造的人間をつくる」という本学の

ミッションにかなっています。

このような形で今 AP の事業を進めているところでございます。来年の前進をご期待ください。ありがとうございました。

司会：関田先生ありがとうございました。このまま引き続き講評に移らせていただきたいと思います。菊池先生・小松川先生からそれぞれ一言ずつお願いしたいと思います。

菊池先生：関田先生どうもありがとうございました。最初の感想は、経営学部を交換していただきたいということです。玉川大学経営学部は2001年スタートで、その時私が経営学部をまとめていましたが、玉川大学の一番良い学部になろうと思っていました。現状は学生のトラブルと退学生が一番多い学部で、どんな場合でも一番最初に問題として挙げられるのが経営学部です。関田先生のお話を聞いて、経営学部に突出してしまうわけではありませんが、果たしてこれは学生の成果なのだろうか？もちろん学生の成果であることはその通りなのですが、教育体制の成果であることをとても感じました。現場で学生と向き合っている先生一人一人、もしくは学生課で学生と向き合っている職員一人一人による教育体制が、おそらく学生たちに浸透しているからこういった成果があげられたのではないかなととても思います。通常どこの大学でも経営学部に入學する学生は、大学の教育理念や特徴を把握しないで入ってくる学生が多いと思います。それは経営学部には滑り止めできたり、自分の偏差値が丁度良いから来たりする学生が多いと私は思うからです。おそらくスタートの段階ではそのような学生が創価大学にも相当いたのではないかと思います。しかし一方で、その学生がこれだけの成果をあげられるとなると、やはりその学生のポテンシャル以上に創価大学の経営学部もしくは経営学部を支えようとするスタッフの成果かなと思いました。単

にアクティブラーニングだけでなく、アクティブラーニングを支える大学の姿勢というのが玉川大学と比べ物にならない位強く、大きいともすごく思いました。

とりわけ「学びの集大成」のサンプル集は、ぜひ出来上がったら私も見せていただきたいと思うのですが、昨今、定量的な数値が動きすぎていると思っています。こういった定性的な学生の成果は、もっと私たちは大事にしないといけない。先ほど「個別性がとても重要だ」と私は申し上げましたが、こういうところに創価大学を創価大学たらしめる文化が創られていくのではないかと思います。ここには経営学部以外の教員・職員もたくさんいらっしゃると思いますが、おそらくそういった良い取り組みをしている学部を一つのロールモデルとして競い合っていけば、全ての学部が良い方向に進むのではないかと私は思います。

本当に私は驚きました。感動もしています。本当に玉川大学の経営学部は問題をたくさん抱えていますので、それから比べたら「何でこういう結果になるんだろう？」と思いました。繰り返しになりますが、創価大学の教育理念をうまく浸透させることができたスタッフの成果だと思いました。その他の事に関しましては、今日見せていただいたものを早速玉川大学のAP事業に関わっているスタッフに渡して、負けられないように頑張りたいと思います。私からは以上です。

司会：ありがとうございます。続きまして、外部評価委員を代表して小松川先生お願いします。

小松川：千歳科学技術大学の小松川でございます。私は外部評価委員として初年度から皆様方大変熱心な取り組みを拝見し、毎年「ぜひこれを参考にして千歳科学技術大学もなんとかしないといけない」と常に学ばせていただいています。全体の振り返りを含めてみなさんにいく

つかお話ししたいと思います。まず創価大学のAP事業の取り組みの大変優れている点は、2つあります。他大学が真似できない、参考にできない、創価大学だからできる優れた点と、他大学がぜひ参考にした方がいい優れた点があると思います。その中で今日は、他大学が参考にした方がいい優れた点を2つお話しします。

1つ目は（毎年見ていて思いますが）全学的にアクティブラーニングの実施体制を上手に作られていて、最初の設計が非常に良いことです。これはぜひ他大学が真似した方がいいと思いますし、みなさんが生き証人として実際にしているのがすごいなと思っています。創価大学の優れた先生方だからこそもしかしただきしているのかもしれませんが、たてつけはとても良いと思います。まず、「汎用的な能力」の定義をしっかりとされていて、学部にかたよらずに学生にとって共通の軸を作られています。それに沿って非常に細かく研修制度を作っていて、お互いに教えあう環境ができています。それから、これは非常に上手だなと思っていますが、先導学部を一つ作り、その事例を横展開で共有するやり方をしているという取り組みは非常に優れていると思います。中規模・大規模の大学になかなかアクティブラーニングが広がらないという中で、創価大学が全学的にできているやり方を全国の大学が参考にして進めた方が良いでしょうと思います。これはある意味教員向けの優れた取り組みだと思いますだと思います。

2つ目が学生向けで作られていると思うところです。学生が成長していく学士課程に沿って、育成すべき能力の評価ポイントを設定されているのは大変優れていると思います。一言で言うと「アセスメント科目」というものを定義されている点です。学生はいろんなカリキュラムを受けながら成長し、それを通して本来修得すべき能力が確かにある。その点を学生の成長段階でしっかり見ていらっしゃると思います。この取り組みは大変素晴らしいなと思います。私の大学のどの科目も、リーダーシップやコミュニケ

ーション力が大事だと皆口にしますが、それを大学として具体的にどう評価するかとなりますとなかなか難しいです。その中で創価大学は全学のカリキュラム体系の中でアセスメント科目をうまく考えてされているのが大変素晴らしい取り組みですし、他大学が参考にすべきだと思っております。

それから個別ですが、今年の成果についてそれにコメントをします。卒業生向けになる「汎用的能力に関するアンケート項目」の整備をされ、それで評価されることは簡単にいうと実証実験ですし、創価大学の事例を通じて良さそうかどうかの議論がこれからされると思いますが、このような成果をぜひ他大学に公開していただけるとありがたいと思います。企業の側から見れば創価大学の学生だけでなくいろんな大学の出身者が出てきますので、こういった評価軸は共通化して良いのではないかと思います。リーディング大学として実証されたものを他大学に公開していただくことはとても重要になりますので、ぜひ公開をお願いしたいと思います。

それからアクティブラーニングのビデオを作られましたが、これから学ぼうとする学生に見せるのはとても大事ですね。特に入試を意識されていると思いますが、アドミッションポリシーとリンクするのはすごく重要です。これから来る学生に、「創価大学の学生として、ここが大事なんだ」ということを見せようとする姿勢はとても大事ですし、さらにPASCAL入試で実際に行っていることが素晴らしいと思います。今日見させていただきましたビデオの、「創価大学」という文字を外していただけると自分の大学でも使えるかと思いましたが（笑）、ぜひビデオも他大学に公開していただけるとよいかと思います。千歳科学技術大学でもそうですが、アクティブラーニングの授業をすると毎回「先生、何でしゃべらないのですか？」と学生から必ず言われますので、あのビデオを見せて「これが主旨です」と伝えることは他大学でも使えると思いました。

最後にFDのガイドブックですが、非常勤の先生方にも配布するのは素晴らしいと思います。千歳科学技術大学も小さい大学ですが、非常勤の先生との意思疎通はとても大事な所ですので、創価大学がこういうガイドブックを使って常勤・非常勤に関わらず教育改革に取り組もうとされることがとても素晴らしいと思います。

今後の期待として、「学びの集大成」という言葉が出てきたと思いますが、これまで学部関係なく汎用的なところをAP事業で進めてこられていると思いますが、最後は関田先生のお話でもありましたように、ディプロマポリシー（DP）という出口をどうするかという整合性となると、学部の特特殊性・専門性がポイントとして出てきます。そことAP事業をどうカップリングするのかぜひ見てみたいです。最終年度に向けて、学部ごとのCP、DPとAP事業の成果がどう結びついてくるのかを非常に楽しみにしています。特に、学部の先生方がお持ちの専門科目の中で、学生にどうリアルな学び、問題発見・問題解決をしていくのかが先生の腕の見せ所ですね。ここを見てみたいのが正直なところです。

おそらく初年次教育になると、例えば実際に地域に学生を出してリアルな環境を与えるなどの工夫をいろいろされていると思います。しかし、学部の専門となると、各先生方の専門の中で学生にどうリアルな環境を与え、問題を意識させて解決するのか——。それこそ、社会に出た時に学生が「大学に来てよかったな」と思う所かもしれないですね。そういう契機も含めて。そういう専門教育でのアクティブラーニングが、入学から卒業に向けての学びの集大成として、先生方の「卒業研究」や「3年生の後半の科目」の（授業）の中で、「これだけ人生が変わりました」という学生のコメントをぜひ見てみたいと率直に感じた次第でございます。

いずれにしても、本当に創価大学の取り組みは優れています。創価大学でないとできない

優れた取組みかもしれませんが、みなさんが日頃熱心にされた成果でもって、本当に多くの大学が参考になる取組みをしていただいています。ごいなと頭が下がる思いであります。どうもありがとうございました。

司会：小松川先生どうもありがとうございます。それでは最後に、本学副学長田中亮平よりご挨拶申し上げます。田中先生よろしく願います。

田中副学長：本日は誠に忙しい中、2017年度AP事業報告会にこのように多くの方にお集まりいただきまして、大変にありがとうございました。学内の先生方にとりましては、今日の報告会によりまして現時点での本事業における自分がやっていることの立ち位置・位置関係をあらためて確認していただいたのではないかと思います。また学外からも今日はおいでいただいているかと思いますけれども、本学の取組みに対する理解を深めていただき、今後また有益な助言をいただければと思っております。とりわけコメントをいただきました菊池先生と小松川先生、大変にありがとうございました。過分なお褒めの言葉も含まれていたかと思いますが、「こういうところは期待している」と言っていただきまして、たいへんにありがとうございました。

菊池先生のご講演につきましては、私も本当にたくさんのヒントをいただいたと思っております。特に「自己と集団」、「人材と人財」の違い、「学習と学修」について、いみじくも昨日「文科省はどういう意図でつかっているのだろう」という話をしたところでありましたので、今日のお話を伺って非常にクリアに理解しました。初年次教育のお話の中にあつた「Mind the Gap」のお言葉が非常に心に残りました。そういえば最近電車を降りるときに電車とホームの間が空いているのが怖いと思う年齢に私もなってきましたので、私が（東京）大学に入

学したころを振り返りますと、ガイダンスも何もなく、ヘルメットをかぶった人がガーッと乱入してきて「ドア閉めろ」「鍵締めろ」と言ってから怖い話をずっとするみたいな環境で、「大学ってこういうふうなんだ」と思っていたら、沖縄返還闘争で一ヶ月ほど授業がなかったことがありました。そんな初年次教育のかけられない状況の中で、見事に菊池先生がおっしゃっておられました「大学生活には、はるかに多くの娯楽の機会がある」というギャップにはまりきってしまった初年次を過ごしました。

今は本当に学生は手厚く初年次教育をもらって羨ましいなと、他人事のように思っているところではありますが、菊池先生に言っていただきました「初年次教育の目標というのは、個人として自己を表現し、自己を肯定しながら集団に所属するその方法を学ばせることだ」というお言葉を本当に私共も肝に銘じてこれからも進めていきたいと思っております。今後とも応援の程、ご助言の程よろしくお願いいたします。本日は大変にありがとうございました。

司会：以上をもちまして、AP事業報告会を終了致します。本日はご参加いただきまして、誠にありがとうございました。